

底本の原理 The Rationale of Copy-Text

Walter Wilson Greg

訳 前田貞昭・田口真弥

「底本」copy-text という用語を作ったのは、マッケロウ Ronald Brunlees McKerrow [1872年～1940年] である。マッケロウはトーマス・ナッシュ [1567年～1601年] 作品集 *The Works of Thomas Nashe* 全5巻 (De la More Press、1904年～1910年) を編纂した時に、初めてこの用語を使ったのだが、編纂作業の基礎に選んだ早い時期の本文という、既に馴染みがあった概念であり、しかも一般的な意味を持たせただけで、その内容は格別に新しくはなかった。しかし、本稿でも触れるように、やがて、マッケロウはこの底本という用語に、この時とは若干異なる厳密な意味を与えることになる。この意味の変化が何をもたらしたのかということについて、本稿では考察したい。

聖書研究の領域でも幾分似通った経緯が見えることは見えるのだが、特定の本文（もちろん、通常は手書きの文献であるが）に優越的権威を認めた上で、それを学問の対象として扱おうと考え始めたのは、〔古代ギリシア・ローマの文献を対象とする〕古典学者たちであった。折衷本文主義が謳歌していた頃には、特定の本文に優越性を認めるのは（たとえ、その優越性が自明のものであっても）邪道だと見なされていたのだが、19世紀の中頃になって、ラハマン Karl Konrad Friedrich Wilhelm Lachmann [1793年～1851年] を始めとする人々が、本文研究の拠るべき原則として、写本の系統的分類法を導入した。これによって、〈最も信頼すべき本文〉most authoritative text という概念に、少なくとも実証科学としての素地が与えられたと評してよいだろう。系統的分類法の導入は本文研究の分野ではかつてない画期的な進歩であったが、弊害も生んだ。弊害とは、論理的分析力もない軽率な追従者が、本文研究を機械的処理方法のレベルにまで貶めたことである。機械的処理によって大量の不純物を一掃できるようになったことは、系統的分類法の唯一の偉大な効用だ。しかし、系統的分類法の性急な心酔者たちは、本文の信頼性が決して絶対的なものではなく、相対的なものでしかないと理解できなかったか、あるいは、その点に十分に留意しなかったのである。そこに、弊害が生まれた最大の要因があった。ドイツを中心に発生したこの学派は、ある写本が他の写本よりも多くの部分で正しく、そして、転写過程で他の系統の本文との混淆がなく原型から伝来したことが明らかであれば、明白な誤りの箇所を除いて、その写本に従うのが「科学的」と考える。ハウスマン Alfred Edward Housman [1859年～1936年] が痛烈な皮肉を交えながら暴露したのは、この誤謬であった。ハウスマンは単に次の点を指摘しただけであった。「ある本文の中で、理解可能な箇所は常に正しく、一方、理解不可能な箇所は常に誤っているというようなことは、事の本質からしてまずあり得ない、あったとしても偶然の産物とも言うべき現象だ」。^(注1) もし、転写者が間違いを犯せば必然的に文意が通らない本文になるというのは、暗黙の、しかし、全く保証のない、その学派の仮定である^(注2)。そういう仮定は、文意が通るか通らないかを自分で判断できると過信している人間には好まれるだろうが、そんな弁別などできないことだと十分承知している人間には受け容れがたい。残念なことに、機械的処理方法の魅力が、多くの才能を惑わせてしまったのである。

古典を対象とする場合と英文学を対象とする場合とでは、本文校訂の方法に重要な違いがある。古典を対象とした場合では、それなりの明白な理由があって、綴りを一般的なものに統一することが慣習化している。だから、古典学者の役割は（本文を修正 emendation する以外は）意味上で違いがある異文の中から、どの本文を採用するかということに限定されている。一方、現在、英文学の世界では、最も早い本文の綴り、もしくは、特定の本文の綴りを原文のまま生かしている。こうした事情から分かるように、底本の概念が古典編纂者と英文学編纂者とでは明白に異なる。このような私の見方が正

鵠を射ているとすれば、古典研究にいう「最善の」best 写本だとか「最も信頼できる」most authoritative 写本だとかいう理論は、その理論が適切に適用されようと、明白に誤って適用されようと、英文学における底本理論とは全く何の関係もない、と一歩踏み込んで断言してもよい。

私は、「現代綴り」modern spelling と「古綴り」old spelling の論議に関わろうとは思わないし、「古綴り」を生かすべきだとする、現在、英文学研究者の間で支配的な見解に異義を挟むつもりもない。私が考える底本理論と深く関わるのは、そうした現在の慣行が基づいている根拠である。現在では、単語の綴りは、著者自身、もしくは、少なくとも著者の時代や地域の見逃せない特徴だと認識されている。そのため、以前とは違って、今では、現代綴り化しないのが一般的である。私が知る限り、古い綴りを一般的な形に改めるのに代わる方法は真摯に追究されて来なかったし、そのような方法を求めようとしても、文献学的な困難が立ちはだかっていることは疑う余地がない^(注3)。言語学が発展すれば、ある時代や地域あるいは著者の基準となる綴りを確立できる日が来るのか、また、言語が変化してきた歴史を顧みれば、(現在よりも少々遡った時点を対象とした場合でさえ) そうした試みが絶対に不可能なのか——これらについて明言する能力は私にはない。しかし、将来はともかく、現時点で、原本の綴りを現代化しても混乱と誤謬をもたらすに終わるだけだという大方の判断に賛成したい。したがって、著者が書いたものに最も近いと考えられる現存の本文を選択し、それに最小限の変更を加えるのが現代の編纂作業である。ここで、本文の読みに際して極めて重要で substantive readings と呼ぶことにしたいもの——これは文字通りにそこに書かれている事柄についての著者の意図や表現の本質に関わるもの——と、それ以外のものとの違いを明瞭にしておく必要がある。それ以外のものとは、綴り・句読法・分綴法などの類で、主として形式面に関わり、非本質的・附随的と見なされるものである。後者は accidentals と呼ぶことにしたい^(注4)。この両者の区別は、私の臆断でもなければ、理論上の仮説でもない。本文研究の実践から生まれたものである。このように言うのは、転写者(植字工)が通常両者を区別するように要求されていたし、この二つの範疇の違いに転写者が対応していたことを多くの実例が示しているからだ。転写者がうっかり原本を写し間違えることも確かだし、何らかの理由によって、意図的に原本そのままに転写しないこともあるのだが、substantive readings に関しては原本を正確に再現することを目指していたと見てよい。その〔転写ということに対する〕考え方も〔原本への忠実の〕程度も様々であるにしても、原本に基づいて転写作業は行なわれるのだが、accidentals に関しては転写者は自分たちの慣行や好みに従おうとする習癖が強い。このような事情で、現存の写本は原本の表現そのままを伝えないかも知れないのだが、それと同時に、少なくとも原本の時代の綴り、場合によっては、その何箇所かは著者自身の綴りさえ残しているかも知れないのである。また、完璧に現代綴り化された後年の写本でも、原本にあった表現の本質的なところは非常に正確に再現している可能性もある。したがって、特定の本文を底本として選ぶのはあくまでも便宜に過ぎない。文献学や言語学の研究段階を鑑みると、そうした便宜的措置に拠るしかないのである。底本に従うのは(無理がない範囲内でのことだが)は accidentals の領域だけである。そして、substantive readings については、古典学者と同じように、私たち現代の編纂者は、底本にとらわれないで選択する自由がある(それが責務でもある)。その事情は本文を現代表記化することがあったとしても変わらない^(注5)。

しかし、substantive readings と accidentals の区別については世に知られてこなかったし、その相違を明確にしたものも目にしたことはない^(注6)。これは意外なことではない。古綴り old spelling 派と現代綴り modern spelling 派は主として1550年から1650年までの間に書かれた作品を対象に論争していたが、当然のことながら、それらの作品のオリジナリティーは原則として印刷本に求められるものであった。通常、それぞれ直近の版から作成される印刷本は、同じ原本を起源とする一つの系統〔単一系譜〕の中に位置付けられる。一方、原本から別々の機会に転写されるか、あるいは、概ねのところでは他の写本の影響を受けずに転写されて現存している写本群は、通常、系統上は並行関係〔並列系譜〕にある。印刷本の場合は、再版以降に改訂 revision がなければ、普通は初版のみが権威を持つ。そして、この初版の権威は、当然、substantive readings はもちろん accidentals にも及ぶ。そのため、16世紀や17世紀の作品の編纂に携わった者が、substantive readings と accidentals の相違に気づき得る機会は全くなかった。再版以降において著者自身によって改稿が行なわれた revised とか、別に著者

の権威と比肩し得る substantive な異版が存在するといった稀なケースにも遭遇しなかったので^(注7)、かれらが全く馴染みのない新しい本文編纂方法を必要とする事態は、決して起こらなかったのである。もし、かれらが筆写によって伝えられる本文の事情に精通していれば、自らの方法を再考し、私が提唱している substantive readings と accidentals との区別を導き出していただろうと想像される。写本であれ印刷本であれ本文推移を扱う本文研究の基本原則は同じではあるが、特定の条件が異なるとそれに対応して基本原則のある部分だけが際立つことがあるようだ。それはともあれ、底本の概念が生み出され、印刷本編纂の分野に広く適用されて来た。本稿においては主として印刷本を考察対象とする。特に手稿と限定しない限り、ここで言及するのは印刷本のことだと理解してもらいたい。

冒頭でも触れたが、*The Unfortunate Traveller* を収録したトーマス・ナッシュ作品集 *Works of Thomas Nashe* 第2巻をマッケロウが編纂・出版した1904年の時点では、私が提案している substantive readings と accidentals との区別、あるいは、底本に関して検討すべき課題があることもマッケロウの念頭には全くなかったのは明白である。マッケロウは *The Unfortunate Traveller* の初期の各版を校合した結果、「新校訂増補版」Newly corrected and augmented というタイトルを付けて喧伝された第2版に著者ナッシュが手を入れた事実は確認できるにしても、全ての変更がナッシュによるものだという確証もない^(注8) という結論を得ている。それにもかかわらず、マッケロウは言葉を継いで次のような原則を明言する。「もし、最も後年の訂正 corrections を反映した本文で、そして、その訂正 corrections の、少なくとも幾つかが著者の手に成ったことを否定できないとする十分な理由があれば、編纂者はその本文を reprint 編纂の基礎とするよりほかに選択の余地はない。」^(注9) 太字は私のものである^(注10)。この原則の厳密な適用について、かつて、私は「底本の完璧性の保持」として賛意を表したことがあった。しかし、ここには、事実上、二つの全く異なった原則が含まれていることは指摘しておかなくてはならない。その原則の一つめは、一般化して言えば、どんな理由に基づくのであれ、ある特定の本文の権威を包括的に認めると（全く成立し難い読みや解釈を強いられるといったことが明白な箇所を除いて）、編纂者はそこにある substantive readings を全て受け容れなければならないというものだ。この考え方は「最良の本文」best text の誤謬と以前から言われていて、現在では支持されていない。もう一つの原則についても一般化して言うと、著者によって改稿された revised とか、他の本文よりも著者の意図した substantive readings が全般的に保持されているとかの理由で、ひとたび、その優越性を認めてしまうと、その本文を底本として扱わなければならない、accidentals に関わる要素についてもその底本に従わなければならないというものである。二つめに挙げた accidentals に関わる原則は、いま、私たちの興味を惹くものであるし、後年のマッケロウも少しは疑問を抱くに至ったものだ。

1939年、マッケロウは Oxford 版 Shakespeare の序論 *Prolegomena for the Oxford Shakespeare* を出版した。この時のマッケロウは、これまでの35年間に多少とも見解を変更したこともあって、本文研究者としては以前のマッケロウとは違っていた。マッケロウが見解を変えたものの一つに本文改訂 revision に関することがある。マッケロウは、改訂の加えられた reprint であっても、底本に用いることは擁護し難い行為であるとの見解に達していた。著者の自筆原稿と深い関係を持つ substantive な版であっても（たとえ本文の転写系統が明瞭であっても）、その版に基づいて作られた reprint は自筆原稿から遠ざかっていると考えるのが理に叶っている、というのである。本文改訂 revision に関わる諸問題は全て一旦措こう。もし、そのように考えてよいのなら、reprint（本文が改訂 revised されているか否かは問わない）を重視して、底本を原著性に優れた substantive な版に置き換えることは、本文の形式的側面においては、著者の原文からは少なくとも一步は遠ざかったということを意味する^(注11)。マッケロウが次のように書いたとき（*Prolegomena* の17頁～18頁）、そうした反省が多少は起こったに違いない。

たとえ、シェイクスピアの意図を反映したと確信できる訂正 corrections が施されていたとしても、それが後年の版であれば、reprint^(注12) の底本に使うというようなことには決して従えない。しかし、これらの訂正 corrections を私たちが作る本文に取り込まなければならないことに、疑問の余地はない。しかし、(略)、後年の版（訂正部分 corrections を除いて）は、自筆原稿から作成さ

れた初版より広範囲に混濁を生じさせる傾向にある。(略)(だから)理想に最も近い方法は、初版の中から、「良い」good 刷り print で一番早いものを底本に選び出して、そこに初版にある著者自身の訂正 corrections と思われるものを取り込むことである。

これはマッケロウの立場を明確にする発言である。そして、ここで、マッケロウは、私が主張している、substantive readings (本文訂正 corrections を取り込む方法からそれは窺える) と accidentals (あるいは本文の全体的な質感) との区別を正確に描き出している。しかし、マッケロウは、substantive readings に関しては、奇妙な方向にずれていった。マッケロウは、上に引用したように「著者自身の訂正 corrections と思われるもの」を取り込む必要を語りながら、折衷主義を認めることを過剰に恐れたようで、次のように続けている。

〔底本選択の際には〕本文の読みだけから、その本文が過不足なく解釈し得るか否かということを判断基準として、その良否 goodness を判断してはならないし、また、審美的価値に訴えるか否かを問うべきものでもない。全体を包括的に認めようとする版に出現する異文の中に、通常の校正者の手に成ったとはとても思われぬ、担当校正者の性癖や特徴を反映した異文を含んでいるか否か、さらには、戯曲総体として、作者らしい演劇的精神の内的調和と呼ぶべきものを反映しているか否かを検討しなければならない。ひとたび、十分な検討を終えたら、明らかな誤謬・誤植と思われる箇所以外は、その版が選択したものを全て受け容れなければならない。

マッケロウの考えは明瞭だろう。すなわち、〔明らかな〕訂正 correction (おそらくマッケロウは改稿 revision も、訂正 correction に含めることを意図していた) の根拠・証拠というものを検証する際、本文全体を一体として考えていたのである。しかし、マッケロウは、重要さにおいてはこの前提条件と変わらないもう一つの前提条件を付け加えるのを忘れていた。それは、全ての変更を包括して受け容れるとか言う前に、中には部分的な変更しかなされていないものも存在するという (*The Unfortunate Traveller* の場合のように、明らかに全く異なる要因から異文が発生していることもあるが) 前提条件である。マッケロウ自身が述べているように、マッケロウの規範意識は、まさしく、「最も信頼性のある手稿」most authoritative manuscript という古典編纂理論と通底しているのである。

だから、後年のマッケロウは、改訂 revisions の手が入った場合には、substantive readings と accidentals の相違についてはずいぶんと注意して本文編纂を行なった。しかし、*Hamlet*、そして、おそらく *Henry IV* の二部作や *Troilus and Cressida*、*Othello* のように substantive な本文が複数現存するケースでは、マッケロウは決して両者を区別しなかった。察するに、マッケロウは、著者の表現 wording への忠実度が底本決定の条件の一つだとする以上、編纂者の干渉を最低限に留めて底本の substantive readings に従うべきだと考えていたはずだからだ。

客観的方法が主観的方法に取って代わったのだから、マッケロウにしる他の編纂者にしる保守的な学派は、異文の選択を編纂者個人の判断に任せるよりも、客観的方法の方がまだ原文を損ねることが少ないとは考えていたが、だからといって、そのような手順を踏めば常に著者の原文を確定するに至るとは信じていなかったのではあるまいか。私はこの問題の決着はまだついていないと思っている。編纂の過程から編纂者個人の判断を排除することは難しい。編纂の過程には、底本の選択という極めて重要な問題から、小さな問題ではそれぞれの部分部分でどの読みが成立しどの読みが成立しないのかを決定するということまでが含まれている。このような事情が明らかにしているように、複数の読みの中から一つを選択する能力を、編纂の過程に要する能力から取り除くことなどできない相談なのだ。別々の編纂者が編纂に当たった結果が一致したとしても、もし、それが底本の明らかな誤謬箇所だけに限定されたものであれば大した価値はない。編纂者が誤りを犯すことは避け難いにしても、恣意的な規則に従うのではなく、編纂者が判断を下してこそ著者の書いたものに近づけるという考え方が楽観的に過ぎると思わない。

底本の支配は(一般的には) accidentals の領域に留められるべきであり、substantive readings の選

扱に関わることは、底本の準則といった狭い領域を越えて、本文研究の一般理論に属すると考えるのが適切であることは強く主張しておきたい。校訂版 *critical edition* 編纂においては、適切な底本を選んだとしても、その底本が数多くある異本の内の中で必ずしも最適の *substantive readings* を提供しないという事態が起こり得るのである。*substantive readings* と *accidentals* とを仕分けできないままに底本の準則に従った結果、これまで、ついつい底本に即き過ぎたり、広汎に過ぎる信頼を底本に置く誤りを犯してきた。すなわち、底本の横暴と呼ぶべき事態が生じてきた。私見によれば、その横暴が歴代の卓越した編纂の成果を損なうことは少なくなかったのである。

最近仕事の関係で私が目にした底本の横暴と呼ぶべき例を二つ示してみよう。都合のよいことに、二例とも、世に権威を認められた研究者が編纂した本文に見られるものだ。断わっておくが、例に引く二人の研究者だけが、いま問題にしている「底本の横暴」に振り回されていたということではない。まず一つめは、ボウアズ F. S. Boas が携わったマーロー Christopher Marlowe (1564年～1593年) 著 *Doctor Faustus* (1932年) の編纂例である。ボウアズは、B テキスト (1616年) と呼ばれる本文を編纂の基礎として選択し (この選択は私も正しいと考える)、必要に応じて A テキスト (1604年) ^(注13) と校合しながら校訂 *correcting* を施している。Faustus の有名な冒頭の独白は1604年版には、

Bid *Oncaymæn* farewell, *Galen* come

とあり、一方、1616年版には、

Bid *Oeconomy* farewell; and *Galen* come ...

とある。現在では、*Oncaymæn* は「*on cay mæ on*」もしくは「*ὄν και μη ὄν*」を意味すると認められている。しかし、17世紀当時はここの解釈に困ったようで、1609年と1611年に出版された A テキストの *reprint* はこの箇所を *Oeconomy* に代え、さらに、B テキストもそれを踏襲した。この改変によって、処理に困る厄介な一行が発生することになったのである。さらに、1616年版は韻律の観点から *and* を加えた。ボウアズは、当該行の前半は正しい読みを A テキストから復元したのだが、後半部分は底本の B テキストのままにしたのである。ボウアズの処置は底本尊重の態度によるものだろうが、そもそも、*and* はボウアズが採らなかった B テキスト前半部分と韻律的に調和させることが目的で挿入されたものだったのである。底本に機械的に従うことを退けるべき事例としては、これ以上適切なものはなかなか見あたるまい ^(注14)。

もう一つ、シンプソン Dr. Percy Simpson [1865年～1962年] が1941年に編纂したベン・ジョンソン Ben Jonson の仮面劇の脚本から、*The Gipsies Metamorphosed* の例を引こう。シンプソンはハンティントン手稿 *Huntington manuscript* を底本に採用しているが、これには私も全面的に賛成だ。このシンプソン版では、下品な *Cock Lorel* のバラードは次のようにある (丁重にも！)。

All w^{ch} he blewe away with a fart

ところが、他の信頼できる版では *blewe* は *flirted* となっている。現存する文献にこの文脈に相応しい意味を持つ *flirted* の用例が見つからないために、今日の私たちは *flirted* の意味を即座に思い浮かべることができない。しかし、名詞の *flirt* には稀に「突風」という意味の用例がある。*flirted* はジョンソン自身の造語であって、転写者や植字工がこの *flirted* という単語を作り出したとは考えられない。*blewe* は原稿を理解できなかった転写者の出鱈目な推測以外のなにものでもない。底本の催眠術にかかると、これほど明瞭な事実が見えなくなってしまうのである ^(注15)。

近年編纂された英文学作品の中から、底本を尊重し過ぎたために多く出現する誤謬の類を例示してみた。原著性が確かなたった一つの本文だけに依拠しようとする態度は、編纂者個人の判断を排除した理論によって本文を構築したいという切願から生まれたものであり、個人的趣味・判断による操作

への不信（この不信は十分に根拠のあることだ）に由来する。歴史的には、初期の本文編纂者たちが採った方法に対する、起こるべくして起こり、また、多くは意義のある反動であったと説明できる。奔放な折衷主義や個人的嗜好に偏した本文に満足できなかった本文研究者たちは、誰が操作しても一律の結果を導く機械的システムの確立を模索していたのである。かれらの努力が全て空しく終わったわけではない。たいていの reprint に価値がないことが分かったのは成果の一つである。また、さらに厄介な手稿の転写過程の領域においてさえ、形体上の法則によってある程度までは処理を可能にしたのも、その確かな成果である。すなわち、形体上の法則によって、少なくとも予備的な問題の整理ができたのであった。このような形体上の法則の効用について、拙著 *Calculus of Variants: An Essay on Textual Criticism* [Clarendon Press, 1927年] で述べておこうと思ったのだが、その調査過程で、形体上の法則が適用できる範囲には決定的な限界があることが明白になった。そもそも外在的徴表から判断している限りにおいては、外在的権威が拮抗している本文と本文との間では、その優劣を決定できるいかなる形体上の原則も立てることができないのである。本文編纂において選択という行為は避けられない。自身の判断を下すことを回避したり、あるいは、自分が下した判断を実行に移さないで、例えば底本の権威といった胡乱な規範を最後の拠りどころにするような編纂者は、事実上、編纂者に与えられた役割を放棄しているのである。それにもかかわらず、このような態度は、「厳密な意味で科学的」 *streng wissenschaftlich* という馴染みの慣用句でしばしば賞賛されてきた。しかし、かれらの行なったのは「編纂」という行為ではない。単に権威ある版をそのまま刊行したに過ぎない。権威ある版の刊行という点では完璧であったかも知れないが、かれらが標榜したものとは全く別物を作ってしまったのである。

話の方向が逸れるし、縷言の愚を犯すことにもなるが、それを承知で、編纂行為における底本の位置付けについて、私の見解を繰り返しておきたい。まず言っておきたいのは、英語という言語の歴史的条件が必要とさせるのだが、形体面の追究によって少なからぬ初期英文学テキストが整理できるということである。もし、現存する幾つかの本文が単一の系統を形成していれば、最初の本文を選択するのが本来である。それは、最初の本文が *accidentals* に関して著者のオリジナルに最も近いばかりではなく、検討すべき *substantive* な異文についても（著者による改稿 *revision* 部分は別にして）正しいものを残していると考えられるからだ。全てが支障なく進めば、底本に対する保守的な態度も肯定されてよいだろう。しかし、信頼度が拮抗する *substantive* な本文が複数存在すると（注16）、その内の一つを底本として選択しなければならない。そして、選択した底本が *substantive readings* に関して極めて高い信頼度を持っているわけでもなく、また、相対的に優れているというわけでもなく、*accidentals* に関する限りはその底本に従う必要がある。底本を選択する観点は様々だ。本文以外の外在的な要素という側面から例を挙げれば、それぞれの *substantive* な版がどのような特徴を持った印刷用原本を用いて印刷されたかを考察し、その考察から編纂者が得た見解によって選択することがある。本文に含まれている明瞭な誤りの多寡によって決定するという、本文の内的信頼度によって選択することもある。そして、さらに、原文への忠実度を編纂者が判断しその判断によって選択することもある。——これは内在的指標とも換言できるが、編纂者の個人的趣味に合うか否かということではない。ここで言う「指標」とは、著者が書いた原文をどの程度正確に反映している状況にあるのかという可能性の大小を計る指標のことだ。

これが私が理解する底本の一般理論である。しかし、議論すべき附随的問題は数多く残っている。一つは、底本にどこまで忠実でなければならないかという程度の問題である。理論的に導き出した原則によって、私が述べてきたような方法で底本を利用するのではない。底本を利用するのは、英語という言語の環境や、私たちの文献学上の知見がいまだ十分でないことによって余儀なくされた便宜的手段に過ぎない。だから、*substantive* な異文以外の要素も、底本を神聖視する理由はない。校訂版 *critical edition* 作成の目的が、転写や印刷の誤りを訂正することにあるのは言うまでもない。底本に附された全ての正誤表に従って、編纂者は誤りを正そうとするものである。著者自身に由来するのではなくて、転写者や植字工によるものだと確信できる紛らわしい綴りや奇妙な綴りを訂正しない理由も存在しない。もし、句読法が繰り返し間違っていたり不完全であったりすれば、編纂者自身の遣り方に従って

訂正 **correct** してもよいと思う。原文を十分に吟味し、さらに、文意に大きな影響を与える箇所については編纂者による改変 **alteration** であることを記録しておけば、こうした修正は編纂者の裁量に委ねられていると私は考える。大文字とイタリックの使用に関しても全く同様である。底本が曖昧だったり奇妙だったりする箇所について、〔編纂者が加えた修正を〕記録さえしておけば、編纂者の裁量を狭いところに留めない方がよいと私は考える（著者の自筆原稿を扱っている場合は別にした方がよさそうだが）。ただし、校訂版 **critical edition** は、特定の本文の視覚的特性を記録するのに相応しい場所ではないと思う（注17）。この点では、底本もまた多数の本文の一つであるに過ぎない。以上に述べてきたことは、全て編纂者の裁量の内にある。私としては、編纂者の裁量の幅を広く設定したい。

他の資料によって底本の本文を変更しなければならない場合に、多少の問題が生じる。私は、この場合にも、他資料に出現した本文の表記を厳密に写す必要はないと考える。例えば、底本では **u** と **v** の使い方が古い時代の表記法に従っていて、校訂に使用する他資料が新しい年代のものである場合だ。新しい資料によって古い時期の底本を校訂する場合は、当然、底本と同じく古い時期の表記法に拠らなければならないだろう。さらに話を進めよう。底本にある **hazard** は正しくは **venture** とあるべきだと信じるに足りる理由があるでしょう。そして、底本では常に **venter** という語形で出現していたとすれば、**venter** が採用しなければならない表記であると私は考える。このように、編纂作業において表記を修正 **emendation** する際には、底本の慣習に従わなければならない。

底本と同程度の信頼性がある **substantive** な版が存在する場合、一般論として、**substantive** な異文に関しては底本にとらわれるべきではないことは、既に説明した通りである。この点については、もう少し柔軟な方針を採った方がよいかも知れない。底本の本文と、信頼できる別の資料にある本文のいずれも同程度に信頼できる場合、編纂者にはどのような選択が可能であろうか。底本の方を選択すべき合理的な理由もなく、同じように、底本を変更する理由も全くない場合、底本のままにしておくのが実的な処理法であるのは明白だと思われる（注18）。

もっと重要で困難な問題が、著者による改稿 **revision** に関わって生じる。マッケロウは〔誤植などの明白な〕訂正 **correction** についてだけ述べているようだが、全面的な書き換え **rewriting** を除いて、マッケロウは著者による改稿 **revision** も含めるつもりだったに違いないと思う。いずれにせよ、原則というものは同じように適用されるべきである。マッケロウの言う本文校訂の実際については先に触れたが（本訳稿5頁～6頁）、マッケロウの提唱したのは、以下のような内容であった。——編纂者は **original**〔**reprint** ではないという意味〕な版を底本に選び、誤謬が明白である箇所以外は、改訂版 **revised reprint** に存在する **substantive** な異文を全て組み入れなければならない。——もっとも、この方法が、余りにも大雑把で機械的に過ぎることは既に指摘しておいた。私が提案した（本訳稿6頁）本文修訂 **emendation** に関しては理論的には十分であると考えているが、実践に移そうとすればまだ精度に不足があるだろう。著者による改稿 **revision** や誤植訂正 **correction** の通常の手順では、変更箇所の一覧表か、さもないと、前の版に修正を書き込んだものの **corrected copy** が、著者から印刷所に届けられることになっていた。このような著者の指示に基づいて、印刷者は変更 **alterations** を含んだ新しい版を組んでいたはずである。しかし、印刷者自身の手によって一定程度の異文が作り出されることも想定しなければならない（注19）。編纂者が直面するのは、この二つの範疇の異なったものを選別しなければならないという問題である。私は、次に述べる簡明な内観的方法に任せてよいと考える。もし、校訂 **revision**（もしくは誤植訂正 **correction**）本文が実際に出来上がれば、どんな場合でも編纂者は、

（1）校訂前の原文の方が、著者によるものとして合理的であるか。

（2）原文と差し替えられるべきだと〔編纂者が判断した〕校訂後の本文の方が、著者によるものとして合理的であるか。

という二つの観点から自問してみなければならない。もし最初の問いに対する答えが否定的であるならば、少なくとも信頼すべき誤植訂正 **correction** が著者の手によってなされた可能性が非常に高いものとして、校訂後の本文が受け容れられるべきである（もちろん、それが信じられるものでなければ

ならないが)。(1)に対する答えが肯定的で、(2)に対する答えが否定的であれば、校訂前の原文のままに置いておかなければならない。もし、両方の答えがいずれも肯定的であれば、校訂後の本文を著者自身の手による改稿 revision であると見なして、校訂後の本文を組み入れるのが妥当である。その際、〔編纂者による〕校訂後の本文が、より良くなったとかそうではないとかといった編纂者自身の価値判断は措いて、そういう操作をしなければならない。しかし、こんな場合も見られる。それは、後に出現した異文が全く取るに足りないか、明らかに劣っていて、原文と置き換えることなど到底考えられない場合である。このような場合は、偶発的な事例として本文に組み入れるべきではない。——このような処置はマッケロウの忠実な信奉者には恥辱であるが。——もちろん、私の提案する手順が常に正しい結果を導き出すなどと欺瞞的な主張をするつもりはないが、たとえ、その結果に一致するところがなくとも、全体として見れば、機械的原則に従うよりも余程好ましい成果を生むと私は考える。私が想定するのは、明晰で論理的思考力に優れた編纂者である。本当に無能な編纂者は、どんな方法を選んでも同じだと思う。無能な編纂者はほかの連中よりも害は少ないかも知れないが、何の益ももたらさないのである。いずれにしろ、愚か者たちがその本性に従って振る舞うのを抑えるために、有能な編纂者の自由を抑え込めば、かえって、物事を台無しにするのは目に見えている。

もう一つ、実際の操作手順の例をジョンソンの *Masque of Gipsies* [*The Gipsies Metamorphosed* の異名] から再び引いてみよう。この作品は、後に上演される際、著者の手が広範囲に入ったことで知られている。初版には次のような箇所がある。

a wise Gypsie . . . is as politicke a piece of Flesh, as most Iustices in the County
where he maunds

ところが、改訂 revised 版では、maunds が stalkes に変更されている。現在では maund は beg を意味する隠語として知られていて、ジョンソンが最初に maunds と書いたことを疑う全く余地はない。さらに言えば、ジョンソンが改訂版 revision で比較的平凡な表現に変更したのではなく、先に引いた例(本訳稿7頁)で転写者が flirted を blewe と誤ったのと同じように、転写者があまり見かけない maunds という表現を理解できなくて stalkes に変更したのであろうという方向で十分に論議されてきたものと思われる。もし、ジョンソンが改訂版 revision の別の箇所で、以下のような2行を加筆していなかったのであれば、私は stalkes が転写者の誤りだという、上のような説に傾いていたはずだ。

And then ye may stalke
The Gypsies walke

stalk は忍び寄るという意味で、ほとんどの例では専門用語として使われている。このことから判断すると、先に引いた箇所では、作中の貴族的ジプシーに乞食のような色合いを帯びさせたくなかったので、ジョンソン自身が maunds を stalkes に換えたと推定して矛盾はないと思う。冒険を避ける本文研究者は初版本文 original の方を好むだろうが、stalkes を著者自身による訂正 correction として(少なくともその可能性があるとして)認めなければならないというのが私の結論である。

マッケロウの見解では、通常の場合、誤植訂正 correction や改稿 revision が後に見られたとしても、底本にはオリジナルな版〔初版〕を選択しなければならない。この見解に、私は全く以て賛成である。しかし、マッケロウ自身が認めているように、通常ではない事例もある。既に引用したように(本訳稿5頁～6頁)、マッケロウは、最も早い善本 good edition を底本として採用し、それに訂正 corrections を組み込んでゆかなければならないと主張しているのだが、次のような前提条件も加えている。——「当該の(改訂 revised)版(あるいは、当該の(改訂 revised)版の印刷用原本)の調査が行き届き、そして、その隅々までが(著者自身による)訂正 corrections であることがはっきりと証明できる場合を除いて」(太字はグレッグ)とマッケロウは述べているのである。このマッケロウが言う前提条件は、それを実際に適用しようとすれば必ずしも明晰だとは言いがたい。しかし、この前提条件そのも

のが、著者によって改稿 revised された reprint を底本として使うことを想定している（少なくとも起こり得ると認めている）のは明瞭である。だとすれば、どのような場合に、著者によって改稿 revised された reprint 版を底本として使うことを想定しているのかを考察してみる価値はあるだろう。作品が完璧に書き直され、その新しく書き直された原稿から本文が印刷されている場合には問題は生じない。書き直された revised 版は substantive なものであり、改訂 revised 版がそのような特徴を持つものとして底本に選ばれることになる。しかし、中には、誤植訂正 corrections や変更 alterations をしたいと考えると、以前の版に手直しを書き込んだものを単に印刷者に手渡すことでは満足できずに、著者自身が印刷現場に出向いて、印刷を監督し、各丁が印刷される都度に校正刷に手を加えるような著者もいる。このような場合、早い方の版が著者自身の原稿を底本として印刷されていれば、改訂版 reprint よりも、そちらの方が著者の特徴を忠実に残していると想定されるのだが、改訂 revised 版が substantive readings と同様に accidentals についても著者自身が責任を持っていると判断される場合は、底本には改訂 revised 版を選択するべきだと考えられる。

イギリス古典主義時代の例は、1616年の二つ折本 folio ——ベン・ジョンソン作品集 *Ben Jonson's Works* の戯曲から引いてみよう。同作品集収録時に大幅に改作された *Every Man in his Humour* でさえ、書き直された新たな原稿に基づいて版が組まれたのではなく、1601年の四つ折本 quarto に数多く書き入れされたものに拠って版が組まれたようだ。二つ折本 folio の校正刷へのジョンソンの手入れ revised についてはずいぶんと論争になったが、ジョンソンが二つ折本 folio の校正刷に手を入れたというシンプソンの想定はおそらく正しいだろうし、数限りない印刷進行中の訂正 corrections もジョンソン自身の責任において行なわれたということもまず確かである。このようなことから、二つ折本 folio に収録された *Every Man in his Humour* を底本に採用するというのがシンプソンの最終的な結論であって、シンプソンの判断は多くの本文研究者によって支持されるのは間違いないと思われる。シンプソンの選択に関しては異議を挟むつもりはない（注²⁰）。だが、一点だけ指摘しておこう——この指摘についてはシンプソンも同意すると思われる——。このような選択をしても、著者の個人的特徴を犠牲にすることがあるという点である。具体的に見てみよう。*Sejanus* [ジョンソンの悲劇、1603年] のシンプソン版本文には、ジョンソン流の Apostrophus（版面には母音が省略されずに印刷されているにもかかわらず、母音の省略を示すアポストロフィ）が28箇所あるけれども、実際に二つ折本 folio に出現するのは半分だけであって、残りはシンプソンによって四つ折本 quarto から本文に組み入れられたものである。この操作は、ある観点——少なくとも形式面においては、四つ折本 quarto の方が、二つ折本 folio よりも著者の個性を反映していることを認めることにつながる。

改訂 revision の状況や特徴がそれぞれで余りにも大きく異なるので、初版を底本にする際も、また、改訂 revised された reprint を底本に選ぶ際にも、確かな原則は何もないというのが実際のところなのだ。初版を底本に選んだ場合には著者による訂正 corrections を組み込まなければならない、他方、reprint を選んだ場合には、reprint で発生した著者の手に成らない異文は、著者自身の本文を復元しなければならないということ——これが指摘できることの全てである。二つの範疇〔著者自身に由来する本文異同の範疇と著者自身に由来しない本文異同の範疇〕を区別するために最大の能力を発揮するという責任から編纂者は逃れることはできない。底本を扱う奇術はないのだから、編纂者には判断力を磨く責任と必要がついて回るのである。

論を終えるに当たって、改稿 revision と底本の問題について、もう少し検証しておきたい。*Sejanus* のような作品の場合は、誤植訂正 corrections や著者による改稿 revision が少ないので、四つ折本 quarto を底本に選び、著者が二つ折本 folio で変更したとおぼしい箇所を全て組み込めばよいことは明らかである。この戯曲に関しては、それが求めるべき方法である。しかし、*Every Man in his Humour* のような作品では全く異なった問題が生じる。二つ折本 folio 収録の *Every Man in his Humour* では、著者による改稿 revisions と印刷工程で生じがちな異文とが混在している。そのため、著者の意図を反映した異文であるのか、それとも、印刷工程で偶発的に生じた異文なのかを解明するのは不可能なように見える。両者を選び分けようと試みることもさえ、無謀に思われるほどだ。*Every Man in his Humour* の校訂本 revised version 作成の際には、底本には二つ折本 folio を採用するしか仕方がない。二つ折本 folio

の印刷の際に著者が監督したか否かは問わないで、とにかく著者による改稿 *revisions* が二つ折本 *folio* に加えられているという理由から、*reprint* すなわち二つ折本 *folio* を底本に選択せざるを得ないという事態に至っていることだけがはっきりしているのである。

以上に述べてきたことと関連するが、別の次元に属する問題がある。すなわち、著者自身が印刷に関わってはいないが、信頼度の高い自筆原稿との校合によって改訂 *revised* された *reprint* の問題である。例えば、シェイクスピアの *Richard III* と *King Lear* である。双方とも最良の本文とされるのは1623年刊行の二つ折本 *folio* である。しかし、これは、*substantive* な本文ではない。劇場に保存されていた自筆原稿と校合した結果を広範囲に生かした初期四つ折本 *quarto* から版が組まれた *reprint* である。細かいところまで目の届いた非常に優れた本文なので、校訂者による校訂箇所なのか、あるいは、植字工によって発生した異文なのかを区別することは非常に困難であるが^(注21)、底本には二つ折本 *folio* を用いるしかない。しかも、実際に事に当たろうとすれば、編纂者は、別の要因から生じる難しい課題にも対応を迫られる。というのは、二つ折本 *folio* には著者の手稿からの転写関係が認められる本文が含まれているのだが、四つ折本 *quarto* には単なる剽窃本 *reported text* も含まれているために、四つ折本 *quarto* における *accidental* な特徴をそのまま著者のものとはできないという問題が発生するからだ。このことと同時に指摘しておきたいのは、*Every Man in His Humour* の例から類推されるように、*Richard III* と *King Lear* の四つ折本 *quarto* の信頼性が実質以上に高く評価されているとしても、底本選択に際しては、常に変わらぬ同一の論理をもって臨まなければならないことである。

この論議を始めるに当たって私が望んだのは、実際に編纂に当たった場合に生じる重要で、しかも、かなり紛糾する問題について、私自身だけではなく他の人々の考えをも整理することであった。私自身の考えは多少なりとも明確にできたと思うが、他の人々にとってそうであったのか否かはその人たちが評価すべきことだろう。私と異なった見解を持つのはその人たちの自由である。私が願うのは、法則を示すことではなく、議論が起きることである。

注1、Introduction to *Manilius* (Richards, 1903年) xxxii 頁。

注2、転写者が愚直であればこの仮説が立証される機会が増え、教養のある転写者の手に掛かれれば反証が増えるという結果に落ち着く。ハウスマンが別の機会 ("The Application of Thought to Textual Criticism," *Proceedings of the Classical Association* 第18号、1921年、75頁) に述べているように、これが明白な理由で、この学派は「間違いは多いが、改竄の少ない」手稿を好んで、「訂正 *correct* が施されているが、原文に忠実ではない」手稿を嫌がる傾向がある。今でも、論理的思考を好む本文研究者は、教養のある転写者の仕事よりも、愚直な人間の仕事（それは必ずしも「より良い」ものとは認めていなくても）を好むものらしい。

注3、古英語あるいは中英語のテキストを対象とした試みがあったらしいが、どの程度首尾一貫したものになったのか、また、その全体的な出来具合についても判断する能力は私にはない。いずれにせよ、本稿では、主として17世紀と18世紀の作品を対象にしたい。

注4、どんなふうに使われていようと単語の綴りが、同音異義語を区別するという適切な働きの次元に留まっているのと同じように、句読法も表記の形式的な次元に留まっている限り、句読法が著者が意図した意味に極めて強い「影響を及ぼす」などと考える人はいないだろう。私がここで述べようとするのは実際上の相違であって、理念上のそれではない。*substantive reading* と綴り *spelling* との中間的な次元に単語の語形 *word-forms* がある。この語形が果たす機能については私とは違う見解もあり得るだろうし、転写者が異なればそれに応じて対応を変えなければならないかも知れない。

注5、上述の部分では、両者 [*substantive readings* と *accidentals*] の特徴を際立たせるために、*accidentals* については転写者や植字工がほかの要素に影響されていない点を特に強調した。編纂者は、自らが選択した底本に、原著の特徴がなにがしか残っていることを期待する。私の経験では、*substantive* な異文の分布は本文の推移過程と一致していることが広く認められるが、*accidental* な異文の分布と本文の推移過程との間に相関関係は認めにくい。

注6、多少の論議は、私の *The Editorial Problem in Shakespeare* (1942年) の序論にある。Note on Accidental Characteristics of the Text (1頁～1v 頁) の、特に liii 頁～liv 頁と注1を参照。しかし、その執筆時点では、まだ、底本理論と呼べるほどのものにも至ってはいなかった。

注7、*substantive edition* [本訳稿では、「*substantive* な版」と訳した] というのは、マッケロウの用語で *reprint* 以外の版を指す。*substantive readings* という用語と混乱を起さないだろうから、私も同じ意味でこの語を使う。それぞれの版が出現するたびに著者が改稿した *revised* という仮定に基づいて、著者生前最後に印刷されたものを底本に用いるといった行為に及ぶ、奇矯な編纂者のことは無視した。そんなことをしても、嘆かわしい本文しか生まないのは明白だからだ。

注8、マッケロウは、次のように信じたか、少なくとも次のようではなかったかと強い疑念を抱いていた。——紙面を節約し

ようとした印刷屋の所業か、「自分自身が弄くろうとしている行文の意味をきちんと理解していない誰かの仕業」（第2巻、195頁）であると。

注9、Nashe 作品集、第2巻、197頁。reprint なる用語には疑問がある。もし「編纂者」が正確な reprint を目指しているならどんな立場の編纂者でも初期の版を選んで、そのあるがままに出版するだろう。しかし、マッケロウは必要とあらば底本に修正 emend を加える。マッケロウが校訂版 critical edition と reprint とを区別しなかった証拠である。

注10、太字にしなければ、マッケロウの言い方はもっともらしく聞こえただろうが（現時点でも私はマッケロウの言う原則は誤っていると思うし、後年に至れば、マッケロウ自身も私と同じように思ったに違いない）、太字で強調しなかったとしても、マッケロウの言う方法が理筋の通ったものだというにはならない。

注11、例外の生じる可能性は後で考慮することにして、ここでは、とりあえず、一般的な提案として論を先に進めたい。

注12、マッケロウは、ここでも reprint という言葉を、前の部分と同じように校訂版 critical edition の意味で使っている。

注13、ボウアズの本文は実際には現代綴りに変更されているので、私が提案する底本の原理は厳密に適用はできない。しかし、ボウアズはBテキストこそが権威を持つものと認めているので、原理的には同じである。

注14、あるいは次のような箇所解釈を例に挙げてよいかも知れない。1604年版と1609年版で Consissylogismes とある箇所が、1611年版では subtile syllogismes、1616年版では subtle Sillogismes となっている。1611年版の植字工が原文を十分に理解できなかったのが当て推量で subtile と印刷されたのだが、それが1616年版にも継承されたのである。もちろん、正しいのは concise syllogisms である。ボウアズが1616年版作成の際に使用された印刷用原本に注意を払おうとしなかったために、いたるところに明白な誤りを残してしまっている。具体的に挙げたのは一箇所だが、この例だけでも、ボウアズが1611年版に十分な注意を払っていなかったことは明白である。

注15、ハンティントン手稿 Huntington manuscript には、二つの行が不自然な順序で出現する箇所がある。本文系統をたどれば、行が逆順に印刷されていたのが分かる。しかし、シンプソンは本文系統の問題を無視したようだ。彼はここでも底本に依存することで満足したのである。

注16、これは、シェイクスピアの「不良四つ折本」bad quartos と呼び慣わされているものや、その他のエリザベス朝期の戯曲、そして、全ての「剽窃本」reported texts を対象にした場合に適用されるべきものである。なお、これらのテキストの信頼性は取るに足りないと思われている。

注17、視覚的特性は本文研究の対象ではなく、おそらくは、本文の基本的構成要素とも見なされていない。これについては、附録の一項目として、適切な対応方法があり得るだろう。

注18、このような方法は、私が *The Editorial Problem in Shakespeare* [1942年] に附した序論 (xxix 頁) で、「少なくとも、まるでコイン・トスのごとき、偶然に任せる行為を回避」できることを附け加えて推奨したものである。そのような状況に至った編纂者は、「当然のこととして、底本の本文をそのままにしておくだろうということである。というのも、そもそも底本に選んだ本文そのものが、編纂者によってより正しいという判断を既に下されたものだからだ。」と、私は1942年に書いている。この時に私が書いた内容は、substantive readings の観点から見た正しさが底本選択の一つの基準であることを意味している。そして、また、マッケロウに従って、編纂者は、「言葉遣い・綴り・句読が著者の自筆原稿から最小限しか離れていないと見られる」ものを底本に選ぶべきだということも意味している。序論執筆時と現在とは、私が見解を変えた点が多数あることを言うておかなくてはならない。最大の相違は、現在では、底本の選択に当たっては形体的な側面 [accidentals] だけに拠るべきであり、substantive readings の忠実度は考慮する必要がないと考えている点にある。幸いにも、十中八九はどちらの観点を採用しても、選択される底本は同一であるのだが。

注19、私が言いたいのは、印刷用原本に最も忠実な reprint においてすら、substantive な異文が生じることである。

注20、シンプソンは、1616年版の二つ折り本 folio を印刷した時にジョンソンが監督しなかっただろうと推測している。それにもかかわらず、大半の仮面劇で、シンプソンは1616年版の二つ折り本 folio を底本に選んでいる。この点で、シンプソンの処置には大きな矛盾がある。

注21、二つ折り本 folio の印刷者が犯した誤りだと推定される異文がある。能力が及ぶ限り、これらを発見して訂正することが編纂に当たる者の役目である。

訳者附言

訳出した *The Rationale of Copy-Text* は、ウォルター・ウィルソン・グレッグ Walter Wilson Greg (1875年7月9日～1959年3月4日) による、新書誌学の理論的達成の一つである。*The Rationale of Copy-Text* は *Studies in Bibliography* 第3号 (1950/1951年、19頁～36頁) に掲載され、後、O. M. Brack, jr. と Warner Barnes の共編になる *Bibliography and Textual Criticism: English and American Literature, 1700 to the Present* (University of Chicago Press、1969年)、Joseph Rosenblum 編 *Sir Walter Wilson Greg : A Collection of His Writings* (Scarecrow Press、1998年) などに収録されている。翻訳に際しては *Bibliography and Textual Criticism* 所収本文に拠った。*Sir Walter Wilson Greg : A Collection of His Writings* の注記の方が版元の情報が加えられるなど詳細になっている。また、*Bibliography and Textual Criticism* 所収本文で、

All w^{ch} he blewe away with a fart

と表記されている箇所（本訳稿では7頁に相当）が、*Sir Walter Wilson Greg : A Collection of His Writings* では、

All wch he blewe away with a fart

となっている。このほかは、本文に大きな異同はない。ただし、*Bibliography and Textual Criticism* には、1949年9月8日開催の English Institute において、オズボーン J. M. Osborn がグレッグに代わって本論文を発表した旨が記されている。

複数の訳語が想定されたり、用語としては原文のままの方がよいと判断したものは、原文の表記をそのまま使うか、もしくは、訳語の後に原文表記を残した。原則として、() は一部を除いて原文にあるものをそのまま使い、訳者が補ったものは [] で括って示した。substantive readings は accidentals とともに本論文の重要な概念である。グレッグ理論を発展させた Fredson Bowers の Current Theories of Copy-Text, with an Illustration from Dryden (*Modern Philology*、第68巻、1950年) や *Bibliography and Textual Criticism: English and American Literature* に掲載された O. M. Brack, jr. の Introduction 等では名詞形の substantives を substantive readings の意味で使っている。substantives とした方が簡略ではあるが、グレッグは本論文で substantive を形容詞としてしか用いていない。本訳稿では、原文に従って substantive readings などと表記した。

グレッグや本論文について、その後継者と見なされる G. Thomas Tanselle が *Literature and Artifacts* (Bibliographical Society of University of Virginia、1998年) などと言及するのは当然のこととしても、James Thorpe が *Principles of Textual Criticism* (Henry E. Huntington Library and Art Gallery、1972年) で、また、社会的なテキスト生産を言ってグレッグに批判的な Jerome J. McGann でさえ *A Critique of Modern Textual Criticism* (University of Chicago Press、1983年) で、本文研究の出発点における重要な文献として本論文を引用・紹介し、その意義や限界について触れている。最近翻訳の出たピーター・シリングスバーグ Peter L. Shillingsburg 『グーテンベルクからグーグルへ——文学テキストのデジタル化と編集文献学——』(慶應義塾大学出版会、2009年9月。明星聖子ほか訳。原著は、*From Gutenberg to Google : Electronic Representations of Literary Texts*、Cambridge University Press、2006年) も、「思慮を欠くものとして片づけることはできない」「学術版編纂の真剣な活動」の始発点に、本論文を据えている(邦訳、263頁)。

グレッグたちの新書誌学は、分析書誌学を始めとする「書物にまつわる諸種の具体的事実、すなわち、作者、原稿、転写職人、劇場、印刷所およびそこに働く職人」などの実証的歴史的研究(山田昭広『シェイクスピア時代の戯曲と書誌学的研究——序説——』、文理書院、1969年7月、18頁)を踏まえて、自筆原稿すら存在せず、印刷本にもどの程度著者が関与しているのか分からないシェイクスピアの本文再建を目指して出発したものである。本論文にあるように、グレッグも完璧な本文再建が可能だとは考えていない。客観的資料が乏しいという点で本文校訂に課せられた制約・条件が厳しいがゆえに、逆に、編纂者が介入せざるを得ない余地が大きくなるわけで、グレッグは、客観的資料に依拠できない部分について編纂者の裁量を許容し、大胆な折衷主義を唱えている。それが含意するのはグレッグが作成しようとする本文も、また、絶対的な本文ではなく、編纂者によって作成された本文に過ぎないということであるし、特に留意すべきは、それをグレッグが十分に意識していたことである。

グレッグが扱った英文学作品を対象とした場合に課せられた制約や条件は、日本近代文学作品のそれと同じではない。日本近代文学作品においては、自筆原稿も写真複製版などによって参看が可能なこともあるし、費やされる膨大な時間と労力を無視すれば、作品によっては、自筆原稿・初出紙誌・初刊本・文学全集類・文庫本・個人全集の各本文間の異同を調査することも可能である。上述したような歴史的背景を持ち、対象の性質や年代も異なるグレッグの底本理論を、そのまま日本近代文学作品に適用することは危うさを免れまい。グレッグが本文校訂の実践に基づいて substantive readings と accidentals との相違を提唱したように、日本近代文学作品を対象とした本文研究の方法も、日本近代文学作品の持つ諸特徴に基づいて編み出されるべきものであろう。

例えば、グレッグの言う **accidentals** は送仮名・仮名遣いに相当するであろうと予想される。初出・初刊本などにおける送仮名・仮名遣いの扱い方について、私は、井伏鱒二作品を例にして報告したことがある（「井伏鱒二「朽助のある谷間」初期本文の考察——仮名遣いの推移について——」、『兵庫教育大学研究紀要』第24巻第2分冊、2004年2月。「自筆原稿・初出誌・初刊単行本における送仮名の問題——井伏鱒二「丹下氏邸」を例として——」、『兵庫教育大学研究紀要』第27巻、2005年9月など）。調査対象とした「朽助のある谷間」や「丹下氏邸」の本文推移を追う限りでは、初出雑誌では自筆原稿の仮名遣いや送仮名を基本的に尊重するが（グレッグが本論文で言う **accidentals** とは違って、組版の都合で改変を加えていない）、初刊本の段階では当時の規範に沿って仮名遣いが改訂されていること、また、特に1960年代に入ると送仮名も統一しようとする傾向を見せるなど、送仮名・仮名遣いはグレッグの言う **accidentals** に必ずしも近似するものではないことを明らかにできたのだが、一方、初出本文に即せば、自筆原稿の送仮名・仮名遣いを生かすことが可能であることも意味している。しかし、これは限定された一、二の作品を調査した結果、すなわち、まさしく一斑を垣間見た結果に過ぎない。拙稿「印刷本文研究をめぐる課題」（『昭和文学研究』第53集、2006年9月）で述べたように、他の作品や他の雑誌・新聞でも同じように処理されたのか否かは、詳細な調査を待たなければならぬ。つまり、日本近代文学全体の本文研究を視野に入れた作業が今後の課題である。その上で、相応しい処理方法と理論的用意が必要であるだろう。

この翻訳を掲載した事情について、触れておきたい。1994年秋頃から、私は、井伏鱒二全集編纂に関わる機会を得て、担当巻の解題執筆と本文校訂に当たった。予想外のことで面食らう暇もなく、全集の底本に何を選ぶべきか、また、本文校訂に当たってはどのような態度で臨むべきなのか——これらの課題について自分なりに解答を得なければならない羽目に陥ったのである。

作品が初めて社会的に存在することになった初出本文を底本とするべきか、あるいは、著者の作品完成へ向けた意志の最終的な形態を生かすべく著者最後の手入を底本とするべきか、編集委員会の場で議論になったが、底本には初刊本を用いることに落ち着いた。

井伏は、機会あるごとに自作に手を入れ続けた作家だが、それにしても〈完璧な手入れ〉が可能かという疑問は退けられないし、後年の手が加わった本文を発表年代順に配することは、そもそも編年体という時間系を軸にした巻割・配列方針と矛盾する。その矛盾は、具体的には、次のような奇妙な光景として出現するだろう。——全ての作品が単行本に収録されているわけではないので、単行本未収録の作品に関しては初出本文を採用するしかない。著者最後の手入れ本文を採用すれば、全集には、同じ時期の作品として配列されながら、そこでは若々しい井伏の文体（初出本文）と後年の成熟した井伏の文体（著者生前最後の手入れ本文）とが混在した光景を出現させることになるのである（その状況は、例えば「朽助のある谷間」初出と著者最終手入れ本文を比較すれば非常に明瞭だろう。また、著者最後の手入れと称するものを底本にしたとしても、手入れの時期に隔たりがあるものを編年体で配列すれば、やはり、奇妙な光景が現われることに違いはない）。

初出本文に誤記・誤謬が少ないとは言えない。また、初出本文には、誌紙面の制約（紙幅や校正の時間的余裕も含めて）が強く働く。職業作家たちが、版面上に均質化された活字になって初めて作品が作家の支配から離れて自立すると考えていたとすれば、初出紙誌の版面に十分に手を入れた初刊本において一つの完成段階（近年は「完成」とか「完結」とかいった概念の旗色はずいぶんと悪いが、全集本文として固定する以上、「完成」「完結」といった概念を退けることはできないだろう）に達したと見なされるのではないだろうか。大西寿男が、『校正のこころ——積極的受け身のすすめ——』（創元社、2009年12月、143頁～144頁）で、原稿から版面へ移行した時に生じる変容の様子を校正者の立場から描いているが、大いに首肯できるものである。

accidentals に限定すれば、初出本文の誤記・誤植などが、著者・編集者（校正者）の手を経て、初刊本で正される。初出紙誌の誤記・誤植は初刊本との対校によって、より一層確かに識別できる。初出本文を底本に採用すれば、初刊本においてなされた誤記・誤植を訂正するのと同じような作業を、再度、全集編纂者が校訂と称してすることになる。また、連載ものにおいては、作品全体を見通した本文の改訂が初刊本で行なわれる。もし、連載作品の場合に初出本文を底本に採用すれば、完成途中

の作品本文がそれぞれの時点のままに全集では出現することになる。

初出と初刊本との時間的隔たりが小さければ、著者による改稿も、作品の本質を大きく改変するものではないと予想される。こうした理由で初出本文はそれはそれとして重要だとしても、底本を一つに絞り込む場合に初出本文が相応しいとは考えなかったのである。

だからといって、初刊本が絶対的権威を持つというようなことを主張するつもりもないし、初刊本に従えば楽に作業がこなせるというと言うつもりも、私にはない。初刊本にしても、出版社の組版ルール（ハウス・ルール）に従って、版が組まれる。実際のところ、全集本文のために新たに版を組むとすれば、解決しなければならない課題はそれなりに出現する。例えば、初刊本では行末の句読点が省略されることもあれば、会話末の句点の有無も統一される。だが、そうした組版ルールが一貫して実現されていない場合もあるし（おそらく、植字工の担当範囲が異なることによって、こういう現象が起こるらしい）、また、改丁・改頁と重なって一行空きが見失われることも生じている。グレッグが指摘しているように、初出の誤植が訂正されることが多いが、逆に、初刊本で新たな誤植が発生し、誤植が改稿か判別し難い現象も生じている。初刊本を用いても、それに寄り掛かっているだけでは校訂は行なえないのである。

本文校訂については、過去に全集編纂に実際に関わった研究者・評論家たちの個別の体験談やメモは存在した。また、本文推移を扱う研究もあった。しかし、本文推移の解明は個別の作品研究や作家研究に奉仕するものと見なされていたようで、自筆原稿・初出紙誌・初刊本に関わる精緻な校異の報告があっても、それを印刷工程や本文編纂の問題へ一般化してゆこうとする志向は、少数の例外を除けば極めて稀薄であった。職業作家にとって自筆原稿は印刷への一階梯に過ぎないと私は考えるが、自筆原稿が複製されても、そういう認識は稀薄で、自筆原稿それ自体への物神的関心の内に閉じていたのも現在と変わらない。だから、井伏が職業作家として生きた昭和期において、自筆原稿から初出紙誌あるいは単行本へと本文が推移するなかで、仮名遣い・送仮名・漢字（字体・字形）の相違といったものが一般的にどのように扱われていたのかということも、よく分からないままであった。つまり、その当時、私が見渡した範囲内では、日本近代文学における本文校訂なるものを反省的に捉えて理論的に整備した成果や、昭和期全体を見通した上で本文推移の在り様を捉えた成果を見つけることはできなかったのである。

手稿・写本ではなく、印刷本を対象とした英米系の新書誌学の成果については、幸いなことに、井伏全集に関わる頃には、既に、山下浩『本文の生態学——漱石・鷗外・芥川——』（日本エディタースクール出版部、1993年6月）に紹介があった（同書には、日本近代文学を対象とした本文研究の貴重な実践例も収録されている）。しかし、この分野における基本的文献で邦訳されているものは皆無に等しかった。そのため、山下の『本文の生態学』や、小西甚一「本文批判と国文学」（『文学』第36巻第2号、1968年2月）、同「本文批判の方法体系——作者の意図は契機になりうるか——」（山岸徳平先生記念論文集刊行会編『日本文学の視点と諸相』汲古書院、1991年5月）に導かれつつ、もともと貧弱な上にほとんど錆び附いてしまった英語力を遣り繰りして、英米系の本文研究関係文献を覗く一方、シェイクスピアの本文再建に始まる本文研究に関わる知識を、山田昭広『シェイクスピア時代の戯曲と書誌学的研究——序説——』（文理書院、1969年7月）等の日本語による紹介文献で得るという、たどたどしい道行きをするほかなかった。少なくとも私個人は、理論的根拠という点では、手探りしながら井伏全集の本文校訂に関わっていたというのが実情である。

皮肉なことだが、井伏全集刊行が終わるのと相前後する時期から（ちなみに、1996年11月に井伏全集第1巻を刊行し、本巻の刊行が終わったのが1999年2月であった。別巻の1と2は、それぞれ1999年9月と2000年3月に出た）、日本の近代印刷史を解明しようとする、府川充男『組版原論——タイポグラフィと活字・写植・DTP——』（太田出版、1996年4月）、小池・府川ほか『漢字問題と文字コード』（太田出版、1999年10月）、小宮山・府川ほか『真性活字中毒読本——版面考証・活字書体史遊覧——』（柏書房、2001年9月）等が現われ、また、文化庁文化語国語課『明朝体活字字形一覧——1820年～1946年——』（大蔵省印刷局、1999年9月）や森啓『活版印刷技術調査報告書』（青梅市教育委員会青梅市郷土資料室、2002年3月。改訂版2004年8月）が公刊された。国語学の領域から日

本近代文学文献を照射する今野真二『文献から読み解く日本語の歴史——鳥瞰虫瞰——』（笠間書院、2005年11月）、同『消された漱石——明治の日本語の探し方——』（笠間書院、2008年6月）が、一人の作家から得られた知見だけに依拠することの危うさを明らかにして、同時代の表現・表記の広がりの中から捉えるべきことを示した。これらの成果の出現によって、日本近代文学研究に関わる本文研究の研究条件はずいぶん整ってきたように思われる。

他方、フランス系統の生成論に関しては松澤和宏『生成論の探究——テキスト・草稿・エクリチュール——』（名古屋大学出版会、2003年6月）、吉田城『小説の深層をめぐる旅——ブルーストと芥川龍之介——』（岩波書店、2007年3月）、ドイツの状況については文献学から編集文献学への道筋を紹介する明星聖子『新しいカフカ——「編集」が変えるテキスト——』（慶應義塾大学出版会、2002年2月）などが公刊された。

しかし、英米系の本文研究に関わる基本文献の翻訳を待つこと久しいが、日本語として理解できる訳文を目にする機会を得ない。前述した著書・論文でこれらの文献がそれぞれの文脈で紹介されているのはありがたいが、それだけに一層、直接、基本文献そのものを読んでみたいとも願う。一々、英文で読むのは面倒なので、自家用の試訳らしいものは以前から準備していた。しかし、関係代名詞が二つ三つ、四つ出て来ると私は目が眩んでしまう。実際、その自家用試訳を再読してみると、私の貧困な語学力を証明するかのようには誤訳は目に余り、日本語としてもまことに不十分なものでしかなかった。外国語も古文も苦手だから日本近代文学を研究対象に選んだ私が、なぜ、こんな翻訳をしなければならないのかという疑問と、それをしてよいのかという不安とを拭いきれないが、ほかに誰もやらないならば、自分が翻訳してみようと試みた次第である。誤訳や不明箇所をそのまま公表するのは困る。修士論文作成と重なる慌ただしい時期に作業を強いた結果になったことが心苦しかったが、兵庫教育大学大学院学校教育研究科の大学院生・田口真弥に協力を仰ぎ全面的に訳文を改めることにした。この訳業に付き合わせたことも含めて、私の種々な我儘を容れてくれた田口に深く感謝したい。とはいえ、村上春樹に関する論考を本誌に寄稿しているように、田口も私と同様に日本近代文学を研究対象としている。門外漢の仕業であるがゆえの、誤解や誤訳など少なくなかろうと危惧する。お気づきの点について、御指摘賜れば幸いである。

なお、本文研究との関係を意識した拙稿には、上記のほかに、「井伏鱒二作品本文の諸問題・調査報告——『夜ふけと梅の花』所収作品と「へんろう宿」を例にして——」（『兵庫教育大学近代文学雑誌』第7号、1996年3月。田中雅和と共著）、「「正しい本文」は存在するのか？——井伏作品における本文の問題——」（『プロブレマティーク』第2号、2001年7月）、「井伏鱒二「朽助のゐる谷間」初期本文調査」（『兵庫教育大学研究紀要』第23巻第2分冊、2003年3月）などがある。

（前田貞昭）